

中学生の教師に対する信頼感とその規定要因

中井 大介* 庄 司 一子**

本研究では、中学生の教師に対する信頼感の内容を尺度を作成する中で明らかにし、中学生の教師に対する信頼感とその規定要因について検討した。中学生 345 名を対象に調査を実施した。分析 1 では、生徒の教師に対する信頼感尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。その結果、(1)生徒の教師に対する信頼感尺度には「安心感」、「不信」、「正当性」の 3 つの下位尺度があること、(2)「安心感」、「不信」、「正当性」については、学年によって有意に得点が異なることが明らかになった。分析 2 では、生徒の教師に対する信頼感とその規定要因について検討した。その結果、(1)各学年とも「基本的信頼感」「保護者の信頼感」が「不信」に影響しており、生徒の教師に対する信頼感には家庭の要因も関連すること、(2)「安心感」「正当性」においては、各学年とも共通して「ソーシャル・サポート」が影響を与えており、生徒の教師に対する信頼感には教師からのソーシャル・サポートが重要な要因であること、(3)「不信」には、「STT 尺度」のポジティブな 2 因子である「安心感」「正当性」と比べ、より多くの要因が関連していること、などが明らかになった。

キーワード：信頼感, 安心感, 教師, 中学生

問題と目的

本研究の目的は、学校教育における教師-生徒関係の重要性と、思春期における特定の他者との信頼関係の重要性を踏まえ、中学生の教師に対する信頼感の内容とその規定要因を検討することである。

近年、学校教育の中で不登校・学級崩壊などさまざまな問題が発生し、児童生徒に対する適切な対処の必要性が高まっている(文部科学省, 1996)。日本でも平成 7 年度から「スクール・カウンセラー活用調査研究委託事業」が実施され、カウンセラー導入の成果が認められるようになってきた。しかし、大野(1997)や石隈(1999)は、このような流れに加え、授業など日常生活の中で児童生徒と直接関わる教師の重要性を指摘している。平成 12 年度から完全施行された教員養成のためのカリキュラムでも、教育実習の時間が増加し、生徒指導・教育相談・進路指導の単位数が増加した。このように、いま学校における教師-児童生徒関係のあり方が問い直され、教師が児童生徒とどのように人間関係を築くかといった側面がこれまで以上に重視されている。

教師-児童生徒関係の研究については、教師との関係が児童生徒の学習の基盤を成し、児童生徒の学級適

応や人格形成にまで影響を及ぼすことがこれまでの研究で指摘されている(浜名・北山, 1987; 河野, 1988; 近藤, 1994; 飯田, 2002)。このような研究の中で、教師-児童生徒関係における信頼関係の重要性が指摘されている。小林・仲田(1997)は児童の学級適応感について調査し、児童と信頼関係を築こうと努める教師の存在と、教師は自分を援助してくれるという児童の意識が学級適応感につながると指摘している。

一方、児童生徒のメンタルヘルスの観点から、児童生徒の特定の他者との信頼関係の必要性も指摘されている。酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村(2002)は、高いストレス状況に置かれた生徒が、それでも健全な学校生活を送るためには、「重要な他者」との間に信頼関係を形成していることが必要であると指摘している。東京都子ども基本調査報告書(東京都生活文化局, 1999)においても、「重要な他者」との信頼関係は、思春期の精神的なストレスを低減し、情緒的な充足感をもたらすことが指摘されている。

このように、教師-児童生徒関係や思春期の児童生徒のメンタルヘルスにおいて重要とされている信頼感であるが、日本においてその信頼感を実証的に扱った論文は限られている(川上, 2001)。特に、学校での教師-児童生徒関係の信頼感に焦点を当て、詳細に検討したものは報告が少ない。教師の勢力資源に関する研究など(田崎, 1979; 浜名・天根・木山, 1983)、従来、教師と児童生徒の人間関係の研究とされていたものは、児童生

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1
chim_pan_ze7@hotmail.com

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

徒が教師の指導態度・指導行動をどのように認知しているかといった、信頼される教師側の特性である「信頼性」についての研究がほとんどであった。

信頼感については、これまでもあらゆる人間関係に影響を及ぼす変数として、協力や相互作用が必要とされるすべての社会的状況で欠かすことのできない問題として指摘されてきた (Rotter, 1980 ; Johnson & Swap, 1982)。最近では、信頼感は、人々の精神的健康を高め維持する効果や、ストレス耐性の強いパーソナリティとの関連という視点でとらえられ、その重要性が指摘されるようになってきている (天貝, 2001)。

信頼感に関する研究は、大きく分けて、Erikson (1959) を中心とする精神分析理論による基本的信頼、Rotter (1967) を中心とする社会的学習理論による対人的信頼、実験社会心理学におけるゲーム理論、の3つの方向から研究されてきている。その中で、従来の信頼感に関する研究は、質問紙によって対人的信頼を測定するものがほとんどであった。質問紙による信頼感の測定は、測定の対象によって、「他者一般に対する信頼」、「特定の他者に対する信頼」に分類される。

他者一般に対する信頼感を測定する尺度としては、Rotter (1967) の「対人的信頼尺度」が存在する。Rotter の尺度が開発されてからは、対人的信頼研究で用いられる質問紙の大半はそれに基づいたものとなっている。天貝 (1995) は、Rotter (1967) や Erikson (1959) の理論に基づき「信頼感尺度」を作成し、信頼感を「不信」、「自分への信頼」、「他人への信頼」の3側面で測定している。

一方、Rotter の「対人的信頼尺度」が、他者への一般化された信頼を測定するのに対し、特定の状況や人といった、信頼感を抱く対象を限定してとらえる尺度も存在する (Johnson & Swap, 1982 ; Rempel, Holms, & Zanna, 1986 ; Anderson & Dedrick, 1990)。

このように、信頼感については実証的研究が少ない中で、いくつかの観点から研究されているが、その定義や対象も研究により少しずつ異なっている。つまり、信頼感はいまだ抽象的な概念であり、信頼感に関して今後より実証的な研究が行われていく必要があると考えられる。また、対人的信頼については、特定の状況や関係によりその内容や程度も異なる可能性が指摘されている (Johnson & Swap, 1982)。しかし、これまでの研究では、他者一般に対する信頼感を測定する尺度が比較的多いのにに対し、状況-特定型の、特定の他者に対する信頼感を測定する尺度が少ないとの指摘がなされている (Anderson & Dedrick, 1990)。

教師-児童生徒関係が、児童生徒の友人関係などと同様に学校教育の一つの基盤をなし、児童生徒の学級適応などに影響を与えていることを踏まえれば、状況-特定型の、児童生徒の教師に対する信頼感を詳細に検討する必要があると考えられる。また、思春期が信頼感の再獲得の時期であるとする天貝 (2001) の指摘や、思春期の他者との関係性がアイデンティティ形成に影響を及ぼすという杉村 (1998) の指摘を鑑みれば、友人や保護者とともに、思春期の「特定の他者」の一人になりうる教師との間の信頼感を検討する必要があると考えられる。

生徒の教師に対する信頼感を検討することによって、最終的には生徒のメンタルヘルスの維持や成長発達の援助、さらには教育実践の質の向上に寄与すると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、発達的に思春期に位置し、教師との関係が複雑化する中学生を対象に、以下の2点を検討することを目的とする。

1. 「生徒の教師に対する信頼感尺度」(Students' Trust in Teachers ; 以下STT尺度)を作成し、生徒の教師に対する信頼感の内容を検討する。
2. 「STT尺度」を用い、生徒の教師に対する信頼感とその規定要因との関連を検討する。

予備調査

目的

予備調査では、教師に対する信頼・不信に関連する項目を自由記述によって抽出し、これに文献研究から得られた項目を加え「STT尺度」を作成する。

方法

調査対象 教育学・心理学を専攻し、修士課程に在籍する大学院生30名(男子16名,女子14名)。

調査内容 小学校・中学校・高校時代に信頼する教師がいたか回答を求めた。信頼する教師が「いる」と回答した調査対象者には、その教師が具体的にどのような教師であったか自由記述によって回答を求めた。また、より広く教師に対する信頼をとらえるために、調査対象者全員を対象に、信頼できる理想の教師像についても、自由記述によって回答を求めた。

調査時期および実施方法 調査の実施時期は2003年6月。調査の手続きは、調査対象者が受講する講義単位で、授業時間を用いて集団で実施された。

結果

自由記述の回答のすべてを文節単位で抽出し、KJ法により分類した。この自由記述の結果に、先行研究

から選定した項目を加えたところ、生徒の教師に対する信頼感の概念として、「安心感」、「尊重」、「資質への確信」、「行動の正当性」、「見通し」の5つが見出された。分類され得られた項目は、心理学・教育学を専攻し、博士課程に在籍する大学院生5名によって内容的妥当性が検討された。内容的妥当性の検証は、大学院生5名が各項目を5つの構成要素に分類し、その一致率によって判定された。

検証の結果、一致率が60%未満の項目が5項目あった。そのため、それらの項目を修正・削除し、最終的に「STT尺度」の項目として55項目が選定された。

本 調 査

目 的

分析1では、予備調査で作成した「STT尺度」の信頼性・妥当性を検討する。分析2では、中学生の教師に対する信頼感とそれを規定する心理的要因との関連を検討する。

方 法

調査対象 首都圏3県の3つの公立中学校について、各校とも1クラス単位の調査を実施した。内訳は、中学1年生121名(男子65名,女子56名),中学2年生104名(男子54名,女子50名),中学3年生120名(男子63名,女子57名),合計345名。

調査時期および実施方法 調査の実施時期は2003年10月~11月。調査の手続きは、調査対象者の在籍する学級単位で、授業時間などを用いて集団で実施された。

分 析 1

予備調査で作成した「STT尺度」の信頼性・妥当性を検討する。

調査内容

① **STT尺度** 予備調査で作成した「STT尺度」の55項目について、「非常にそう思う(4点)」から「まったくそう思わない(1点)」までの4件法で回答を求めた。生徒が回答の際に思い浮かべる教師としては、学級担任、教科担任、養護教諭などが想定されるが、調査の倫理的な観点から、ここでは「学級担任を思い浮かべて」というような教示は避けた。そのため、「特定の先生を思い浮かべて」という教示に対し、調査対象者が思い浮かべる教師が、その調査対象者の教師イメージと深く関わっており、その教師イメージが生徒の心理的要因と関連していると考え、「特定の先生が思い浮かぶ場合には、その先生を思い浮かべて答えてく

ださい。特定の先生が思い浮かばない場合には、学校の平均的な先生について思い浮かべて答えてください。」との教示を行った。

② **学生用ソーシャル・サポート尺度** 教師に対する信頼感が高い生徒は、教師からの情緒的なソーシャル・サポート認知が高いと考えられるため、「STT尺度」の構成概念妥当性を検討するために、久田・千田・箕口(1989)が作成した「学生用ソーシャル・サポート尺度」(以下、ソーシャル・サポート)を使用した。実施に際しては、教師との関係の部分を取り出し、16項目について「きつとそうだ(4点)」から「絶対ちがう(1点)」までの4件法で回答を求めた。この尺度は大学生を調査対象として開発された尺度であるが、項目内容の平易さや項目数の少なさから汎用性の高さが指摘されている(福岡,2001)。また、この尺度は1因子構造であり、高い信頼性と妥当性が確認されている。

結果と考察

1. STT尺度の探索的因子分析

調査項目55項目について、平均値が1.5以下または3.5以上、標準偏差の極端に小さいもの、頻度に偏りのあるものを検討したところ、偏りのある項目は認められなかった。次に、総項目間相関を算出したところ $r = .70$ 以上の相関は認められなかった。よって、全55項目について、スクリー基準に基づく因子分析(最小2乗法・プロマックス回転)を行った。その結果、因子負荷量が.40未満の項目と2因子以上に高い負荷を示す項目が15項目認められた。そこでそれら15項目を削除し、40項目による因子分析(最小2乗法・プロマックス回転)を再度行った。初期解における固有値の減衰状況と解釈可能性から最終的に3因子が抽出された(表1)。

第I因子は、「13. 私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する」、「25. 先生にならいつでも相談できると感じる」など19項目からなる。第I因子には「教師がいることによる安心感」に関する項目と「教師との関係性に対する安心感」に関する項目が含まれていると考えられる。よって第I因子を「安心感」と命名した。Erikson(1959)は、信頼をよく知っていて予測ができる物や人によって与えられる経験の一貫性、同一性、連続性を当てにすることでであると述べており、関係性に対する安心感はこれに関連するものであると考えられる。また、教師がいることによる安心感は、植草・松元(1996)、川上(1999)、廣澤(2002)が信頼される教師の態度として指摘した、「受容的態度」、「親和的行動」、「児童中心」と関連するものであると考えられる。

TABLE 1 「STT尺度」の因子分析結果（プロマックス回転後）と因子間相関

項目	I	II	III	共通性
第I因子 安心感 ($\alpha=.95$)				
13 私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する	.94	.08	-.17	.73
31 先生と話すとき気持ちが楽になることがある	.90	.07	-.09	.73
24 先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる	.84	.03	-.12	.68
25 先生にならいつでも相談ができると感じる	.83	.12	-.07	.63
36 悩んでいるとき、先生が私を支えてくれていると感じる	.78	-.11	-.16	.67
30 先生と話すと、将来について前向きにがんばってみようと思う	.77	.04	.03	.69
6 先生と話していると目の前が開ける思いがすることがある	.77	.05	-.07	.62
12 先生の話聞いて自分のやりたいことがわかったように思う	.76	.06	-.02	.64
2 先生は私を大事にしてくれていると感じる	.68	.01	.16	.72
20 先生は私の意見をよく聞いてくれていると思う	.64	.03	.25	.71
8 先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う	.63	-.04	.04	.55
18 将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になる	.63	.05	.05	.58
1 私は先生の前でも自然にありのままにいられる	.63	-.12	-.15	.52
10 先生はどんな生徒にも好かれていると思う	.58	-.27	-.14	.60
26 先生は私の努力や可能性を理解してくれていると感じる	.58	.09	.27	.67
3 私との約束や秘密を先生なら守ってくれると思う	.58	-.09	.08	.60
41 私が失敗したとき、先生なら私の失敗をかばってくれると思う	.51	-.13	.11	.58
4 先生は頼りがいがあると感じる	.47	-.21	.23	.66
53 先生は私をほめたり、励ましたりしてくれている	.45	.01	.37	.65
第II因子 不信 ($\alpha=.86$)				
15 先生が間違っているときでも、先生は自分の間違いを認めないと思う	.02	.81	.21	.62
33 先生は威張っているように感じる	.01	.77	.03	.65
38 先生は一度言ったことを、こころ変えていると感じる	.04	.69	-.07	.60
14 先生に一方的に規則や考えを押しつけられていると感じる	-.12	.67	.23	.58
9 先生は言っていることと、やっていることに矛盾があると思う	-.16	.63	.30	.53
34 先生は生徒との接し方がうまくないと思う	-.03	.62	-.09	.59
42 先生は他の生徒と比べて私を評価していると感じる	.16	.60	-.32	.59
39 先生の性格には裏表があるように感じる	.00	.51	-.23	.56
19 私は先生が怖くて何も言えない	-.03	.48	.11	.39
22 先生の考え方は否定的だと思う	.00	.47	-.17	.41
54 先生は一部の人をひいきしていると思う	.06	.46	.00	.36
35 先生は先のことを説明してくれないので、何をすればいいのかわからない	.14	.46	-.19	.45
第III因子 正当性 ($\alpha=.80$)				
28 先生には正義感が感じられる	.08	-.10	.64	.62
45 先生には教師としての威厳があると思う	-.08	.08	.56	.38
44 先生は真面目であると思う	-.13	-.02	.54	.44
11 先生はどんな指導でも自信を持って行っているように感じる	-.06	.04	.54	.41
17 先生は教師としてたくさんの知識を持っていると思う	.09	.09	.54	.49
55 先生は私がわかるまで熱心に指導してくれていると思う	.11	-.18	.53	.62
52 私が間違っているときは、先生ならきちんと叱ると思う	.04	.17	.49	.38
37 先生は私の個性を理解してくれていると感じる	.38	.08	.47	.66
46 勉強や部活ができなくても先生は私を責めたりしないと思う	.20	-.02	.47	.54
因子間相関	I	-	-.40	.55
	II		-	-.33
	III			-
ソーシャル・サポート尺度との相関		.69**	-.46**	.58**

枠内は因子負荷量の絶対値が.40以上, ** $p < .01$

第II因子は、「15. 先生が間違っているときでも、先生は自分の間違いを認めないと思う」など12項目からなる。これらの項目は、教師に対する不信に関する項目であると考えられる。よって、第II因子を「不信」と命名した。「不信」には、各質問項目のうち逆転項目が集まる結果となった。逆転項目の集まりである「不信」が、「安心感」、「正当性」の2側面と融合せず、独立的に抽出されたが、天貝(2001)は Carmines & Zeller (1979)を引用し、これが項目測定の際の反応の構えの関数であり、非ランダム誤差の産物である可能性で説明できるとしている。しかし、今回3因子での解釈を採択したのは、天貝(2001)と同様、3因子間のそれぞれの相関が内容的に妥当であったことによる。この「不信」については、Erikson (1959)が「信頼と不信が一定の割合で基本的な社会的態度に含まれること」、「基本的信頼が基本的不信を上回るバランスを保つような永続的なパターンを確立する」ことが望ましく、不信も常に信頼の動的な部分であり続けることを指摘している。

第III因子は、「17. 先生は教師としてたくさんの知識を持っていると思う」など9項目からなる。これらは生徒が教職という職業についている教師に対して期待している、教師としての資質や役割に関わる項目が含まれていると考えられる。よって第III因子を「正当性」と命名した。「正当性」は、山岸(1998)が信頼概念整理図の中で挙げている「能力に対する期待」や、佐藤・松元(1991)、川上(1999)が信頼される教師の態度として挙げている、「真摯な姿勢」、「規律的行動」、「理性的行動」、「自己一致した態度」、「態度の一貫性」と関連するものであると考えられる。これは、生徒がただ単に教師の受容的な態度を求めるだけでなく、ときには、教師の指示的な態度や厳格な姿勢も望んでいるという山口・芹沢・原野(1989)の指摘とも合致するものであると考えられる。

因子分析の結果得られたこれらの3因子は、最初の構成概念と同一ではないが、ほぼ類似していた。因子間の相関係数を求めたところ、全ての下位尺度間で有意な相関が認められた。

2. STT 尺度の信頼性・妥当性の検討

「STT 尺度」の内的整合性を検討するため、「STT 尺度」のそれぞれの下位尺度について Cronbach の α 係数を求めた。その結果、「安心感」、「不信」、「正当性」の α 係数はそれぞれ .95, .86, .80 であった。このことから、「STT 尺度」の3つの下位尺度には内的整合性があることが確認された。

また、「STT 尺度」の構成概念妥当性を検討するため、3つの下位尺度と「ソーシャル・サポート」との相関係数を算出した。その結果、TABLE 1 に示したように、「ソーシャル・サポート」と「安心感」、「正当性」との間に中程度の正の相関、「ソーシャル・サポート」と「不信」との間に中程度の負の相関が認められた。このことから「STT 尺度」の「安心感」、「不信」、「正当性」にはある程度の構成概念妥当性があると考えられる。

3. STT 尺度の学年差・性差の検討

「STT 尺度」の各下位尺度の学年差と性差を検討するため、「STT 尺度」の各下位尺度得点を従属変数、学年(1年生・2年生・3年生)と性別(男子・女子)を要因とする2要因分散分析を行った。TABLE 2 は学年別、男女別の下位尺度得点の平均値および分散分析結果を示したものである。

「安心感」では、学年の主効果が認められ($F(2,266) = 8.24, p < .001$)、Tukey 法による多重比較の結果、1年生が3年生より有意に得点が高いという結果であった。「不信」では、交互作用が認められた。単純主効果を分析したところ、性の要因は3年生で有意であった($F(1,272) = 8.79, p < .01$)。学年の要因は女子で有意であり($F(2,272) = 22.32, p < .001$)、多重比較の結果、3年生が1年生より、3年生が2年生より有意に得点が高いという結果であった。「正当性」では、学年の主効果が認められ($F(2,268) = 4.56, p < .05$)、多重比較の結果、1年生が3年生より、2年生が3年生より有意に得点が高いという結果であった。

このように「安心感」、「不信」、「正当性」は、学年によって有意に得点が異なっていた。1年生は、3年生に比べ、「安心感」、「正当性」の得点が有意に高く、「不信」の得点が有意に低かった。また、2年生は、3年生に比べ、「正当性」の得点が有意に高く、「不信」の得点が有意に低かった。

3年生と1年生、2年生の間に上記のような有意な得点差がある理由としては、3年生になり生徒の自我がより発達し、教師に対する批判的態度が芽生えること、また、生徒の対人関係が友人関係へとより拡大し、教師が絶対的な存在ではなくなり、教師に対し批判的態度をとりやすくなることなどが考えられる。しかし、この学年による「STT 尺度」得点の差については、上記の発達による差の可能性だけでなく、その年の学年の雰囲気など、その他の交絡因子の可能性も考えられる。そのため、どのような要因が、この学年による得点の有意差に影響を与えているかについて今後より詳

TABLE 2 「STT尺度」下位尺度得点の学年・性別による2要因分散分析

	男子			女子			主効果		交互作用	多重比較
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	学年	性別		
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F値	F値	F値	
【STT尺度】										
安心感	2.28(.65)	2.09(.46)	1.99(.73)	2.32(.75)	2.03(.51)	1.92(.50)	8.24***	.17	.22	1>3
不信	1.85(.57)	2.01(.65)	2.09(.63)	1.64(.51)	1.86(.37)	2.40(.58)	22.32***	.04	6.52**	3>1, 3>2
正当性	2.74(.56)	2.79(.44)	2.44(.59)	2.60(.64)	2.61(.37)	2.51(.54)	4.56*	1.39	1.49	1>3, 2>3

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

細に検討する必要があると思われる。

さらに、「不信」においては、3年生の女子が男子よりも有意に得点が高いことが明らかになった。友人関係に表されるように、男子に比べ青年期の女子は対人関係における対他意識が強いことがこれまでの研究でも指摘されている(Stein, Newcomb, & Bentler, 1992)。このような中学生女子の対人関係における感受性の強さが教師に対する「不信」に反映されたと考えられる。

以上のように、「STT尺度」の各下位尺度得点については、学年によって有意な得点差があることが明らかになった。そこで、以下の分析では、学年別に分析を行うこととした。

分析 2

中学生の教師に対する信頼感とそれを規定する心理的要因との関連を検討する。

調査内容

①**基本的信頼感尺度** 他者に対する信頼感が、幼少期の基本的信頼感をもとに形成されるという天貝(2001)の指摘から、谷(1998)の作成した「基本的信頼感尺度」との関連を検討した。この尺度は、1因子構造であり、高い信頼性と妥当性が確認されている。質問項目は、「物事がうまく行かなくなると、自分の中に引きこもってしまうことがある」、「失敗すると、二度と立ち直れないような気がする」など6項目で構成されている。これら6項目について、「非常にあてはまる(7点)」から「まったくあてはまらない(1点)」までの7件法で回答を求めた。

②**対人的信頼感尺度** 基本的信頼感を基に形成され、思春期・青年期を境に発達する他者一般に対する対人的信頼と、特定の他者である教師に対する信頼感との関連を検討するために、谷(1998)の作成した「対人的信頼感尺度」を使用した。この尺度は、1因子構造であり、高い信頼性と妥当性が確認されている。質問項目は、「周囲の人々によって自分が支えられていると感じる」、「一般的に、人間は信頼できるものであると思

う」など5項目で構成されている。これら5項目について、「非常にあてはまる(7点)」から「まったくあてはまらない(1点)」までの7件法で回答を求めた。

③**友人との親密さ** 対教師関係と同様に、中学生にとって重要な対人関係のひとつであると考えられる友人関係と教師に対する信頼感との関連を検討した。親友の有無を確認する項目として、本研究では、酒井ら(2002)の作成した「友人との信頼関係に関する項目」3項目について、「はい(4点)」から「いいえ(1点)」までの4件法で回答を求めた。質問項目は「秘密を話すことができる親友がいる」、「自分と同じ立場になって物事を考えてくれる親友がいる」、「個人的なことを分かち合える親密な友達がいる」の3項目であり、各項目の得点を合成して「友人との親密さ」得点とした。これらの項目は高い信頼性が確認されている。

④**生徒の認知する保護者の教師に対する信頼感** 生徒の認知する保護者の教師に対する態度と生徒の教師に対する信頼感との関連を検討した。本研究では、生徒の認知する保護者の教師に対する信頼感を確認する項目として「学校の先生を信頼している」、「学校の先生のことを良く思っている」、「学校の先生のことを尊敬している」の3項目を使用した。各項目は「とてもそう思う(4点)」から「まったくそう思わない(1点)」までの4件法で回答を求め、各項目の得点を合成して「生徒の認知する保護者の教師に対する信頼感」(以下、保護者の信頼感)得点とした。本研究におけるこれら3項目間の α 係数は.85であり、十分な値を示している。

⑤**ソーシャル・サポート尺度** 分析1で使用した「ソーシャル・サポート尺度」について「きっとそうだ(4点)」から「絶対ちがう(1点)」までの4件法で回答を求めた。

⑥**STT尺度** 分析1で使用した「STT尺度」について、「非常にそう思う(4点)」から「まったくそう思わない(1点)」までの4件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 各尺度の平均値・標準偏差・α係数・尺度間相関

分析に先立ち、まず、各尺度の平均値、標準偏差、α係数、並びに尺度間の相関係数を求めた。結果はTABLE 3に示されている。α係数に関しては、すべて.70以上であり、ある程度の信頼性が得られた。

2. 教師に対する信頼感と心理的要因の関連

分析1の結果から「STT尺度」の各下位尺度得点について、学年によって有意な得点差があることが明らかになった。そこで、学年を調整変数として、学年ごとに「STT尺度」と心理的要因との関連を検討した。ここでは、心理的要因が「STT尺度」を構成する3変数（「安心感」、「不信」、「正当性」）をどの程度予測しうるかを調べるため、3変数各々の得点を従属変数、心理的要因（「基本的信頼感」、「対人的信頼感」、「ソーシャル・サポート」、「保護者の信頼感」、「友人との親密さ」）を独立変数とする重回帰分析を行った。投入法については、「STT尺度」の各因子がどのような要因によって規定されるかを明らかにするという本研究の目的から、探索的な強制投入法による投入を行った。また、投入変数に中程度の相関がみられる変数が存在していたことから、多重共線性の問題を検討するためにVIFを算出した。その結

果、すべての値がVIF<2であり、多重共線性は認められないと判断された。得られた標準偏回帰係数の値をTABLE 4に示す。

その結果、「安心感」においては、1年生で「ソーシャル・サポート」、「保護者の信頼感」の標準偏回帰係数、2年生で「ソーシャル・サポート」、「友人との親密さ」の標準偏回帰係数、3年生で「ソーシャル・サポート」、「保護者の信頼感」の標準偏回帰係数が有意であった。「不信」においては、1年生で「基本的信頼感」、「ソーシャル・サポート」、「保護者の信頼感」の標準偏回帰係数、2年生で「基本的信頼感」、「保護者の信頼感」の標準偏回帰係数、3年生で「基本的信頼感」、「対人的信頼感」、「保護者の信頼感」、「友人との親密さ」の標準偏回帰係数が有意であった。「正当性」においては、1年生で「ソーシャル・サポート」、「保護者の信頼感」の標準偏回帰係数、2年生で「ソーシャル・サポート」、「友人との親密さ」の標準偏回帰係数、3年生で「対人的信頼感」、「ソーシャル・サポート」、「保護者の信頼感」の標準偏回帰係数が有意であった。

以上の結果から、まず、第1に、各学年とも幼少期から形成される「基本的信頼感」が「不信」に影響していることが明らかになった。この結果から、「不信」

TABLE 3 各尺度の平均値・標準偏差・α係数と、尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	平均値	SD	α係数
1 安心感	-								2.10	.64	.95
2 不信	-.39**	-							1.98	.62	.86
3 正当性	.62**	-.32**	-						2.62	.56	.80
4 基本的信頼感	.11	-.29**	.14	-					4.47	1.27	.74
5 対人的信頼感	.38**	-.26**	.46**	.24**	-				4.68	1.16	.76
6 ソーシャル・サポート	.69**	-.46**	.58**	.17**	.45**	-			2.49	.71	.95
7 保護者の信頼感	.67**	-.43**	.55**	.18**	.36**	.67**	-		2.76	.77	.85
8 友人との親密さ	.30**	-.02	.23**	.34**	.46**	.31**	.26**	-	3.29	.81	.88

**p<.01

TABLE 4 学年別による「STT尺度」に影響を及ぼす要因の重回帰分析

	中学1年生			中学2年生			中学3年生		
	安心感	不信	正当性	安心感	不信	正当性	安心感	不信	正当性
1 基本的信頼感	-.05	-.36***	.05	-.13	-.26*	.14	-.07	-.22*	-.11
2 対人的信頼感	-.00	-.09	.13	-.16	.15	.09	.00	-.24*	.47***
3 ソーシャル・サポート	.53***	-.24*	.28*	.62**	-.35	.36*	.39***	-.15	.23*
4 保護者の信頼感	.34**	-.23*	.42***	-.10	-.35*	-.04	.46***	-.30**	.22*
5 友人との親密さ	.11	.05	-.07	.39**	.19	.33*	.09	.50***	-.10
説明率 (R ²)	.67***	.43***	.51***	.50***	.43***	.48***	.65***	.31***	.46***
F値	31.64	13.03	17.73	8.04	5.96	7.49	42.89	10.32	19.41
	df (5,84)	df (5,92)	df (5,90)	df (5,46)	df (5,45)	df (5,46)	df (5,119)	df (5,119)	df (5,119)

数値は標準偏回帰係数, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

については、生育歴における親子関係などの要因が関わっている可能性が推測される。思春期が信頼感の再獲得の時期であることを踏まえると、この時期に特定の他者となる教師と、信頼関係を築くことの重要性が示唆される。

第2に、「保護者の信頼感」は各学年とも「不信」に負の影響を及ぼしていることが明らかになった。この結果から、保護者の教師認知と生徒の教師認知が家庭での話し合いなどを機に相互に影響しあい、その結果として、保護者の教師に対する信頼感の生徒による認知が、生徒の教師認知のある側面に影響を与えているようにも見える可能性が示唆された。また、このように、「基本的信頼感」と「保護者の信頼感」が各学年とも「不信」に負の影響を及ぼしていることから生徒の教師に対する信頼感については、家庭的な要因も関連してくる可能性が示唆された。

第3に、各学年とも「ソーシャル・サポート」が一貫して「安心感」、「正当性」に影響を及ぼしていることから、「安心感」、「正当性」においては、各学年とも共通して「ソーシャル・サポート」が重要な要因であることが明らかになった。各学年とも教師からの「ソーシャル・サポート」が「安心感」、「正当性」に影響を与えているこの結果は、教師と生徒の信頼関係は実際の教師に対する認知が重要であるという岸田(1987)の指摘と一致するものであると考えられる。そのため、今後、教師の勢力資源など、生徒の認知する教師の「信頼性」と、生徒の教師に対する信頼感との関連も詳細に検討する必要があると考えられる。一方、「安心感」、「正当性」の説明率に比べ、「不信」の説明率が各学年とも最も低い数値を示していたことや、「不信」に対する有意な標準偏回帰係数の多さから、「不信」には、「STT尺度」のポジティブな2因子と比べ、より多くの要因が関連している可能性が示唆された。

第4に、1年生は「保護者の信頼感」と「ソーシャル・サポート」が一貫して「STT尺度」に影響していることが明らかになった。このことから、学年が低い1年生の時点では、保護者の信頼感と教師からのソーシャル・サポート認知が生徒の教師に対する信頼感に大きな影響を及ぼしている可能性が示唆された。一方、3年生は、1年生、2年生と比べ、独立変数が複雑になり、3年生だけに見られる独立変数の存在として「対人的信頼感」が明らかになった。1年生、2年生と比べ、3年生において「対人的信頼感」が「不信」、「正当性」に影響を与えている結果は、他者一般に対する対人的信頼が、教師に対する信頼感にも影響を及ぼす

ことを示唆していると考えられる。これは、教師が教師としての役割を果たしているか、教師としての資質を有しているかといったことに、3年生が敏感であることを示唆しており、自我の確立や対人関係の経験による対人的信頼の発達といった、生徒の発達の要因が関連していると考えられる。

第5に、「友人との親密さ」は、2年生と3年生で異なる影響を与えていることが明らかになった。「友人との親密さ」は、2年生では「安心感」、「正当性」に正の影響を与えているのに対し、3年生では「不信」に正の影響を与えており、3年生は、「友人との親密さ」が強ければ、教師に対する「不信」が強くなるという結果であった。思春期は、「重要な他者」の対象が身近な大人から、友人関係へと拡大していき、友人との結びつきが強くなることが考えられる。3年生は、1年生、2年生と比べ「不信」の得点が有意に高いことが明らかになっており、その学年の友人関係内における教師に対する評価や雰囲気がこのような結果に影響している可能性が考えられる。しかし、この2年生と3年生における影響の差異については、これ以外の要因も考えられるため、今後、教師に対する信頼感と生徒の友人関係との関連についてより詳細に検討する必要があると考えられる。

以上のように、生徒の教師に対する信頼感の規定要因については学年によって異なる可能性が示唆された。そのため、今後はこの学年による差異をより詳細に検討する必要があると考えられる。

今後の課題

第1に、本研究は「STT尺度」を作成し、その規定要因を探るという方法論的研究であった。今回の研究は「STT尺度」開発の第一歩であり、得られた結果は現段階での信頼性と妥当性である。「STT尺度」については、内容的妥当性の検証において一致率の基準が60%と低めであったことや、基準関連妥当性など妥当性の検討が若干不十分であったことから、交差妥当性の検討による妥当性の検討や、再検査法などによる信頼性の検討など、今後さらに研究を進めることによって、項目を精選して、概念の信頼性・妥当性を高めていく必要があると考えられる。

第2に、「STT尺度」は、測定対象とする教師をどのように教示するかによって結果が異なり、信頼性が損なわれる可能性もある。そのため、「あなたにとって、あなたの学校で最も信頼のできる先生を思い浮かべて」などの、対象となる教師を限定する教示によつ

て調査内容や信頼性が微妙に変化する可能性もあり、今後は実施の際の教示についても詳細に検討する必要があると考えられる。また、この教示に関連して、調査対象者を、教師全体に信頼感を抱いている調査対象者、一部の教師への信頼感と他の教師への不信感を抱いている調査対象者、教師全体への不信感を抱いている調査対象者に分類し、検討を行う可能性も考えられる。

第3に、生徒の教師に対する信頼感の規定要因については、本研究で取り上げた以外の要因も考えられるため、今後はそれらの要因も含め「STT 尺度」との関連を検討していく必要がある。

第4に、本研究で、「STT 尺度」について学年による差異が見られたことから、調査対象を高校などにも拡大し、学年による差異をより詳細に検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371. (Amagai, Y. 1995 The effect of trust on ego-identity of high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **43**, 364-371.)
- 天貝由美子 2001 信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで— 新曜社
- Anderson, L. A., & Dedrick, R. F. 1990 Development of the Trust in Physicians Scale : A measure to assess interpersonal trust in patient-physician relationships. *Psychological Reports*, **67**, 1091-1100.
- Carmines, E. G., & Zeller, R. A. 1979 *Reliability and validity assessment*. Beverly Hills, CA : Sage Publications. (水野欽司・野島栄一郎 (訳) 1983 テストの信頼性と妥当性 朝倉書店)
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle : Selected papers of E. H. Erikson*. New York : International Universities Press. (小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)
- 福岡欣治 2001 ソーシャル・サポート 心理測定尺度集III—心の健康を測る「適応・臨床」— 堀 洋道 (監修) 松井 豊 (編) サイエンス社
- 浜名外喜男・天根哲治・木山博文 1983 教師の勢力資源とその影響度に関する教師と児童の認知 教育心理学研究, **31**, 220-228. (Hamana, T., Amane, T., & Kiyama, H. 1983 Teachers' and Students' Perception of Teacher's Power Resources and Its Degree of Influence on Students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **31**, 220-228.)
- 浜名外喜男・北山鎮道 1987 教師行動の実験的変容が児童の学級適応に及ぼす影響 兵庫教育大学研究紀要, **8**, 63-73. (Hamana, T., & Kitayama, S. 1987 Effects on students classroom adjustment with the induced changes of teaching behaviors in classroom settings. *Hyogo University of Teacher Education Journal*, **8**, 63-73.)
- 廣澤 守 2002 小学校における教師と児童との信頼関係に及ぼす「かかわり」の影響—児童が担任教師を信頼する理由の構造について— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 324.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 飯田 都 2002 教師の要請が児童の学級適応感に与える影響—児童個々の認知様式に着目して— 教育心理学研究, **50**, 367-376. (Iida, M. 2002 Teachers' demands and pupils' morale in school : Pupils' individual cognitive styles. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 367-376.)
- 石隈利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房
- Johnson, G. C., & Swap, W. C. 1982 Measurement of specific interpersonal trust : Construction and validation of a scale to assess trust in a specific other. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1306-1317.
- 川上華代 2001 青年期の信頼感と対人関係認知に関する一考察 関西福祉大学研究紀要, **3**, 103-115. (Kawakami, H. 2001 A study on trust in adolescents. *Journal of Kansai University of Social Welfare*, **3**, 103-115.)
- 川上 壮 1999 中学校における担任教師の行動が教師と生徒との人間関係に及ぼす影響 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 352.
- 岸田元美 1987 教師と子どもの人間関係—教育実践の基盤— 教育開発研究所
- 小林正幸・仲田洋子 1997 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究—学級の雰囲気に応

- じて教師はどうすればよいのかー カウンセリング研究, **30**, 207-215. (Kobayashi, M., & Nakata, Y. 1997 A study on the relationships between pupils' enjoyment of attending school and teacher's resource of power : How can teacher's use the resource of power according to class atmosphere? *Japanese Journal of Counseling Science*, **30**, 207-215.)
- 近藤邦夫 1994 教師と子どもの関係づくりー学校の臨床心理学ー 東京大学出版会
- 河野義章 1988 教師の親和的手がかりが子どもの学習に及ぼす効果 教育心理学研究, **36**, 161-165. (Kono, Y. 1988 Effect of affiliative cues of teachers on children's task performance. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **36**, 161-165.)
- 文部科学省 1996 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について 中央教育審議会第一次答申
- 大野精一 1997 学校教育相談とは何か カウンセリング研究, **30**, 160-179. (Oono, S. 1997 School counseling services by teachers in Japan. *Japanese Journal of Counseling Science*, **30**, 160-179.)
- Rempel, J. K., Holmes, J. G., & Zanna, M. P. 1986 Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 95-112.
- Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651-665.
- Rotter, J. B. 1980 Interpersonal trust, trustworthiness and gullibility. *American Psychologist*, **26**, 1-7.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞栄城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22. (Sakai, A., Sugawara, M., Maeshiro K., Sugawara, K., & Kitamura, T. 2002 Parent-child relations of mutual trust, trust in one's best friend, and school adjustment : Junior high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 12-22.)
- 佐藤昭雄・松元泰儀 1991 児童・生徒の認知する教師への信頼に関する研究(2) 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 329-330.
- Stein, J. A., Newcomb, M. D., & Bentler, P. M. 1992 The effect of agency and communality on self-esteem : Gender differences in longitudinal data. *Sex Roles*, **26**, 465-483.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55. (Sugimura, K. 1998 Identity formation and relatedness in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **9**, 45-55.)
- 谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, **9**, 35-44. (Tani, F. 1998 The relationship between sense of basic trust and time perspective in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **9**, 35-44.)
- 田崎敏昭 1979 児童・生徒による教師の勢力源泉の認知 実験社会心理学研究, **18**, 129-138. (Tasaki, T. 1979 Perception of the resources of teachers' power by pupils and students. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **18**, 129-138.)
- 東京都生活文化局 1999 大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査報告書 第8回東京都子ども基本調査報告書 東京都生活文化局発行
- 植草伸之・松元泰儀 1996 生徒認知による信頼する教師の態度に関する研究(2) 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 293.
- 山岸俊男 1998 信頼の構造ーこころと社会の進化ゲームー 東京大学出版会 (Yamagishi, T. 1998 *The structure of trust : The evolutionary games of mind and society*. University of Tokyo Press.)
- 山口正二・芹沢知江子・原野広太郎 1989 相談場面における生徒の望む教師の応答様式ー生徒の性格類型とカウンセリング様式の視点よりー カウンセリング研究, **21**, 109-118. (Yamaguchi, S., Serizawa, C., & Harano, K. 1989 Teacher's response style that pupils desire in counseling situation : From viewpoint of personality of students and proposed counseling style. *Japanese Journal of Counseling Science*, **21**, 109-118.)

謝 辞

本論文は、筑波大学大学院教育研究科に提出した修

士論文 (2003 年度) を一部加筆, 修正したものです。本論文の執筆にあたりご助言いただきました先生方, 並びに調査に御協力いただきました中学校の皆様へ深く感謝いたします。また, 論文作成に際し大変貴重なご

意見をいただいた筑波大学の服部 環先生, 並びに査読者の先生方に心より御礼申し上げます。

(2005.7.8 受稿, '06.4.19 受理)

Factors Contributing to Junior High School Students' Trust in Teachers

DAISUKE NAKAI AND ICHIKO SHOJI (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2006, 54, 453-464

The purposes of the present study were to investigate junior high school students' trust in their teachers, and to examine factors contributing to such trust. A questionnaire was completed by 345 junior high school students. The results were as follows: In Analysis 1, (1) exploratory factor analysis of the Students' Trust in Teachers Scale revealed 3 factors: "sense of security," "distrust," and "validity of teacher's behavior." (2) The scores on "sense of security," "distrust," and "validity of teacher's behavior" were significantly different according to the students' grade level. In Analysis 2, (1) multiple regression analysis indicated that "social support from teachers" had a strong influence on "sense of security" and "validity of teacher's behavior" for each grade level. (2) "Distrust" was relevant to more factors compared to the other factors, "sense of security" and "validity of teacher's behavior." (3) Because "basic trust" and "guardian's trust in teachers" had an influence on "distrust" at each grade level, it was suggested that factors in the students' homes may be relevant to their trust in their teachers.

Key Words : trust, sense of security, junior high school teachers, junior high school students